

串間市教育研究所

I	研究主題	-----	4 - 1
II	主題設定の理由	-----	4 - 1
III	研究目標	-----	4 - 1
IV	研究仮説	-----	4 - 1
V	研究構想	-----	4 - 2
VI	研究組織	-----	4 - 2
VII	研究内容		
1	主題について	-----	4 - 2
2	単元及び単元配列の見直し	-----	4 - 2
	(1) 「共通実践単元」及び「選択的に取り扱う単元」設定の観点	-----	4 - 3
	(2) 単元配列表	-----	4 - 3
3	体験活動を充実させた探究的な「くしま学」について	-----	4 - 3
	(1) 理論研究	-----	4 - 3
	① 新学習指導要領を受けての「総合的な学習の時間」の在り方の分析		
	② 地域で学ぶ意義		
	(2) 「くしま学」の在り方	-----	4 - 5
	① 探究的な学習の充実		
	② 体験活動の充実		
	ア 直接的な体験と間接的な体験		
	イ 「課題の設定」「情報の収集」段階での体験活動		
4	指導の実際と考察	-----	4 - 6
	(1) 探究的な学習を充実させた「くしま学」の1単元の流れ	-----	4 - 6
	① 単元名		
	② 単元目標		
	③ 単元の流れ		
	(2) 体験活動を充実させた探究的な学習の実際	-----	4 - 7
	① 間接的な体験活動を取り入れた実践例		
	② 児童の思考を大切にされた実践例		
	③ 直接的な体験活動を取り入れた実践例		
	(3) 授業の考察	-----	4 - 10
VIII	成果と課題	-----	4 - 10
	○ 主な参考文献		
	○ 研究同人		

I 研究主題

ふるさと串間への愛と誇りをもつ子どもの育成

～一貫教育における地域学「くしま学」の指導の改善を通して～

II 主題設定の理由

串間市は「学力向上」と「地域に貢献できる人材の育成」を目指し、平成20年度から小中高一貫教育をスタートさせ、小・中・高等学校が連携を図りながら、本市の教育課題の解決に取り組んでいるところである。その大きな特色の一つが「くしま学」である。「くしま学」の目標は、「串間市の自然・環境、歴史・伝統、産業・生活等について、串間を体感させながら系統性・一貫性をもって発展的に学ばせ、串間市について理解を深め、串間と自分に対する自信と誇りを育むとともに、串間の未来と自分の生き方を結びつけ、生涯にわたってふるさとを愛する心と態度を育てる」ことである。これまで、この目標に向かって、串間市内の各学校で意欲的な取組が展開されてきた。

「くしま学」の主な成果として、①地域の教育資源を効果的に活用することで、子どもたちが地域のことを身近に捉え、意欲的に学習するようになった、②地域の方々に取材したり、ゲストティーチャーとして学校に来てもらうことで、学校の取組に対する理解が進み、地域と学校が一体となって子どもたちを育てる体制ができている、などがあげられる。

しかしその一方、①単元の精選が図られておらず、一学年で行う単元が多すぎることで、探究的な学習が十分に行われていない学校があること、②「くしま学」が、「総合的な学習の時間」として位置づけられたことで指導の内容や方法のより一層の工夫が課題となった。これらの課題から、体験活動を適切に位置づけた横断的・総合的な学習や探究的な学習を行っていくために、単元の見直しや、指導内容や方法の改善をする必要があると考えた。

そこで、今回、串間市教育研究所では、串間市のくしま学部会と連携して、「くしま学」の共通単元案を作成し、体験活動を充実させた探究的な学習の在り方について研究を深めていくことにした。

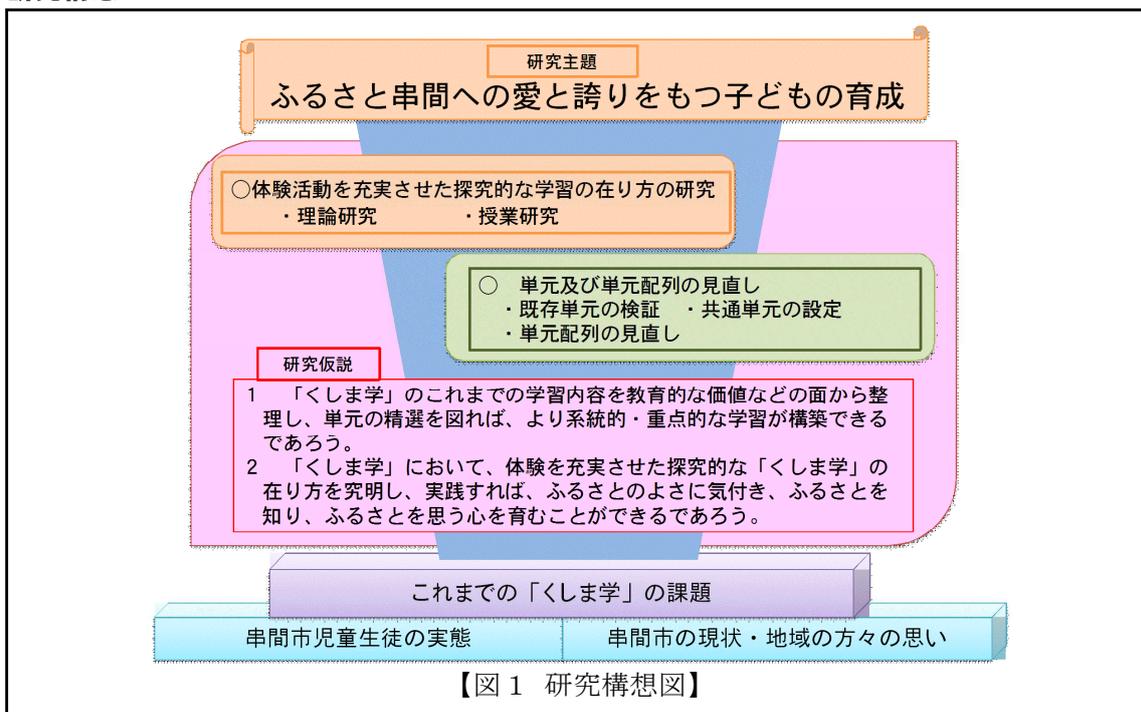
III 研究目標

ふるさと串間に対する愛と誇りを育て、生きる力を高める教育の実現を目指し、「くしま学」の指導内容や指導方法の改善を行い、串間市における一貫教育の推進に寄与する。

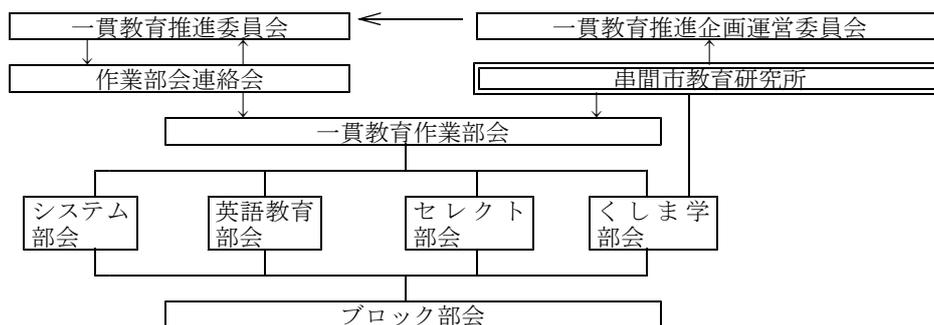
IV 研究仮説

- 1 「くしま学」のこれまでの学習内容を教育的な価値などの面から整理し、単元の精選を図れば、より系統的・重点的な学習が構築できるであろう。
- 2 「くしま学」において、体験活動を充実させた探究的な「くしま学」の在り方を究明し、実践すれば、ふるさとのよさに気づき、ふるさとを知り、ふるさとを思う心を育むことができるであろう。

V 研究構想



VI 研究組織



VII 研究内容

1 主題について

主題にある「愛」や「誇りをもつ」というと、心情的な部分で、実際にどのような子どもに育てて欲しいのかが見えにくい部分がある。そこで本研究では、「ふるさと串間への愛と誇りをもつ」具体的な子どもの姿を以下のように定義し、研究を進めていくことにした。

- 串間市の「自然・環境」「歴史・伝統」「産業・生活」「人物」について調べ、よさに気付き、そのよさを自分の言葉で語るができる子ども
- 串間のよさと串間の現状や問題点とを比較し、串間の課題を自ら見つけ、自分の課題として捉えることができる子ども
- 地域の人々の思いや取組に触れ、自分でも課題解決へ向けて意欲的・継続的に考え行動することができる子ども

2 単元及び単元配列の見直し

新学習指導要領では、「総合的な学習の時間」の標準授業時数が、中学校1年が50単位時間、

それ以外の学年では70単位時間となり、これまでのように、「くしま学」の全単元を網羅的に取り扱うことが困難になってきた。「くしま学」を立ち上げたときの理念でもある「実践しながら、常に改善を加え、よりよい内容にしていく」という考え方を踏まえた上でも、「くしま学」の見直しをする必要がでてきた。そこで、成果を上げてきたこれまでの学習内容は大きくは変えずに、全ての学校で必ず取り組む単元と、各学校が選択して取り組む単元とに振り分け、「くしま学」の単元の精選を図った。

(1) 「共通実践単元」及び「選択的に取り扱う単元」設定の観点

「串間に生きる人として必ず学習しておきたい単元」を共通実践単元とし、その見極めと発達段階に応じた系統的、発展的な配置を行い、授業実践を通して、よりよい「くしま学」の在り方を追究することにした。単元配列表を見直し、以下のような観点で、全学校が共通して実践する単元とそれぞれの学校の実態に応じて選択的に取り扱う単元とに振り分けていった。

- 串間市が宮崎の他地域また全国的に誇れるもの、また、キャリア教育の視点から必要な単元は共通して実践する。
- 他教科や他の単元と重複した内容のものは、統合したり選択的に取り扱うようにする。
- 串間の中でも地域性が強い単元は、選択的に取り扱う。
- 資料が少なく、十分に調べることが難しい単元は、選択的に取り扱ったり、関連した単元と統合したりするなどして取り扱う。

(2) 単元配列表

《これまでの単元配列表》

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
自然・環境	季節を感じて身近な自然と遊ぼう(春夏)	四季を感じて身近な自然と遊ぼう(秋冬)	近くの自然(海・山・川)を知ろう	近くの自然(海・山・川)を知ろう		串間にある天然記念物		私たちの暮らしと環境-ホテルを探そう-	私たちの暮らしと環境-本城干潟-
歴史・伝統	地域の人と遊ぼう(8)	地域の人と「伝承遊び」で遊ぼう	串間の郷土芸能や祭りを探ろう	名所や旧跡を調べよう	郷土料理作りに挑戦しよう	地名を調べよう		史跡・名勝から串間の歴史を探ろう	
産業・生活			日本一のブランドへ「かんしよ」	串間の特産物・海産物のひみつを探そう	串間の特産物・くだものを探そう		知っちゃう？串間の特産物		串間市の予算の行方～私の税金はどこへ～
串間の未来と将来の自分						こんにちは！大先輩	職場見学をして職業について関心を持とう	職場体験にいこう	高校訪問をして自分の進路について考えよう
串間の人物					三戸サツエさんについて知ろう	神戸雄一さんについて知ろう	内野重昭さんについて知ろう	「旧吉松家住宅」について知ろう	大覚寺義昭について知ろう

《共通実践単元一覧》

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
共通実践単元			串間の郷土芸能や祭りを探ろう	近くの自然(海・山・川)を知ろう	串間にある天然記念物	串間の有名人	知っちゃう？串間の特産物	職場体験に行こう	私たちの暮らしと環境

3 体験活動を充実させた探究的な「くしま学」について

研究主題に迫るために、体験活動を充実させた探究的な「くしま学」の在り方を究明する必要があると考え、学習指導要領を中心に理論研究を行い、「くしま学」の在り方を考えていった。

(1) 理論研究

① 新学習指導要領を受けての総合的な学習の時間の在り方の分析

総合的な学習の時間の目標の中に「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して」とある。このことは、日常生活や社会に目を向け、子どもが自ら課題を設定し、探究の過程(課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現)を経由し、自らの考えや課題が新たに

更新され、探究の過程が繰り返されることを意味している。

【課題の設定】 ■体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ。

課題を設定するには、まず豊かな体験を積んでおくことが欠かせない。これまで子ども自身が積み重ねてきた豊富な体験から得た知識や技能等に対して、教師が意図的に働きかけることによって、これまでの知識等とのずれを感じさせ、子ども自身が疑問を感じ、課題を設定するようにする。

例：「理想と現実の対比」「夢や憧れを抱かせる」等

【情報の収集】 ■必要な情報を取り出したり収集したりする。

「情報の収集」段階では、各教科で身に付けた知識や技能を活用し、多くの情報を得させる。子どもが設定した課題をもとに、課題解決のために目的をもって、観察、実験、見学、調査、追体験などの情報収集を行う。

例：「体験活動」「インタビュー」「アンケート」「電話・ファクシミリ」等

【整理・分析】 ■収集した情報を整理したり分析したりして思考する。

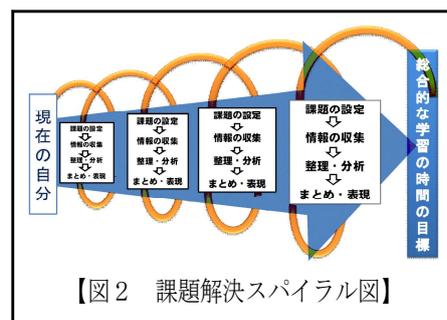
収集した多くの情報から、必要に応じてツール(ウェビング、KJ 法等)を用いながら、思考力・判断力を使って整理・分析させていく。その際、どのような情報がどの程度収集されているか把握し、情報の整理・分析の方法を決定することも大切になる。例：「カード」「マップ」「メリット・デメリット」「ベン図」「ランキング付け」等

【まとめ・表現】 ■気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断、表現する。

自分の考えをまとめたり、他者に伝えたりすることで、整理・分析された情報が子どもの経験や知識とつながり、一人一人の確かな考えとなっていく。また、新たな疑問を生み出していくことにもつながる。

例：「新聞」「レポート」「写真や図、グラフなどを使ってプレゼンテーション」等

総合的な学習の時間では、「探究的な学習」の充実を図ることが重要視されている。探究的な学習とは、上に示した問題解決的な活動が右図のように発展的に繰り返されていくことである。しかし、この学習過程は、いつも順序よく繰り返されるわけではなく、前後したり、一体化したりする場合がある。上に示したような学習活動は、子どもたちが真剣に課題を解決しようとする中に自然に生まれてくるものであり、学習活動のつながり、つまり、子どもの思考の流れを大切にしていく必要がある。

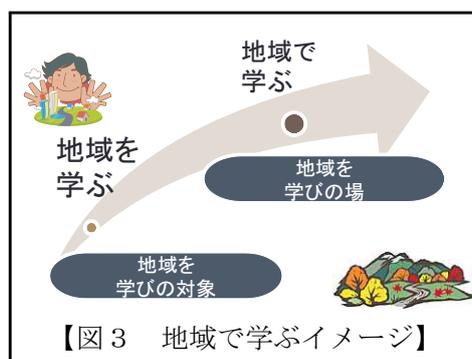


【図2 課題解決スパイラル図】

② 地域で学ぶ意義

新学習指導要領によると、各教科の知識・技能を習得する意味とは、習得すること自身が目的ではなく、その知識・技能を活用し、探究していくことであるとされている。知識基盤社会と言われる現在、子どもたちは、社会に出たときに学校などで学んだ知識や技能を生かしていく力を身に付けておかなければならない。総合的な学習の時間は、学校と社会とのつながりをもたせ、知識・技能の必要性を感じながら活用の仕方を学んでいく役割を担っている。

子どもたちにとっては、学習の対象が近くにあり、直接「見て・触れて・感じる」ことができ、実感を伴いながら考えることができる『地域』という社会は、素晴らしい学習の場である。自分からみて遠くにある学習対象を、インターネットで調べて終わる活動ではなく、自然や歴史、文化や産業等に直接触



【図3 地域で学ぶイメージ】

れる活動によって、ふるさとのよさに気づき、ふるさとを知り、ふるさとを思う心を育

むことができる。さらには、地域で学んだことを生かし、より広い社会での事象を学んでいくことができる。

以上のことから、教師は地域の役割を再認識し、主体的に学ぶことのできる子どもの育成を意識しながら教育実践の積み重ねをしていかなければならない。

(2) 「くしま学」の在り方

① 探究的な学習の充実

子どもたちが学習対象（串間の人・社会・自然等）に主体的にかかわりながら課題をよりよく解決していけるよう「くしま学」における「探究的な学習の過程」を充実させることにした。今年度は、7つの共通実践単元において、以下の点に留意しながら、目標や指導内容、学習過程等の例を示すことにした。

ア	共通実践単元の目標の設定においては、「くしま学」で身に付けさせたい能力や態度、学習事項などを考慮しながら設定する。
イ	「探究的な学習過程」については、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を基本的な流れとし（以下『1サイクル』と表記）、1つの単元で、『3サイクル』以上、展開させながら学習を行うようにする。
ウ	各単元について、明確なねらいをもって指導ができるように、各サイクルを以下の視点を参考に設定する。
第1サイクル	(学習対象のよさ・すばらしさに気づく)
第2サイクル	(学習対象の問題点、子どもの考えと現実との「ずれ」に気づき、新たな課題を設定する)
第3サイクル	(学習対象を自己の生き方とのかかわりで考える)
第4サイクル	(学習対象を自己の生き方とのかかわりをふり返り、かかわり方を見直す) （中学生）

② 体験活動の充実

本研究では、「体験」を、感覚機能を使って、対象へ働きかけることで、自分なりに価値や意味、かかわり方を見だし、自分を見つけ認識していくこと、「体験活動」を、体験を通じて何らかの学習的効果が得られることを目的として、子どもに対して意図的・計画的に提供される学習活動ととらえている。

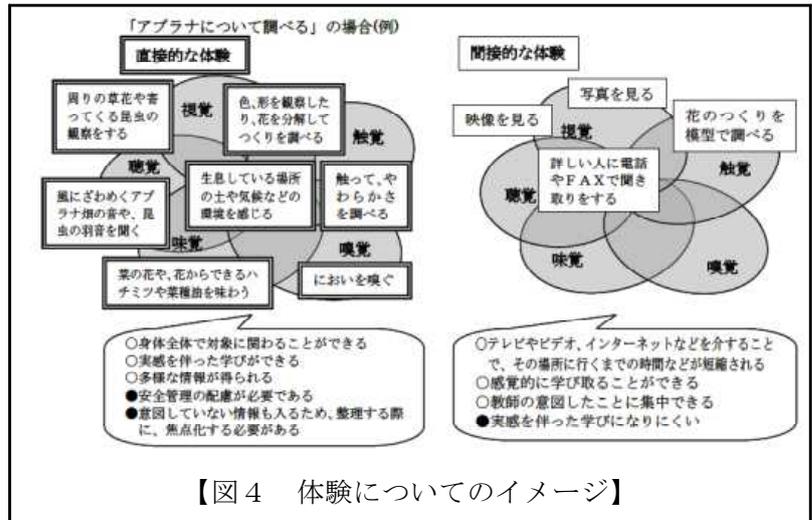
体験活動は、課題発見等の学習への動機付けや意欲・学びへの好奇心を高めること、あるいは、思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していくこと、さらには、次への体験や学びへの深化を促すことなど、「学びの過程」の基盤と成り得るものである。

具体的実践においては、その体験活動を通して、「子どもたちにどのような力が身に付くのか」また、「子どもたちが自分自身の生き方についてどのように考えるのか」等を明らかにして、指導過程の中に、体験活動をより効果的に位置づけていくことが大切である。

ア 直接的な体験と間接的な体験

同じ体験からでも、子どもたちのこれまでの生活経験の違い等によって、感じ方や疑問の持ち方にも違いが生まれ、考えが広がることが予想される。考えが広がるということは、子どもたちの主体性を大切にしながら学習を進めたり、多様な考えを交流する中から、よりよい考えを作り出すなどのよい面がある。しかし、一方、広がりすぎて、教師が意図していた目標につながらなくなる可能性も出てくる。そこで、広がりを持たせたい場合と、考えを絞ってより深く追究したい場合とで体験のさせ方を変えていく必要があると考えた。

例えば、学習の中で「植物を見る」という体験活動を位置づけた場合、植物が生えているところに行って見る『直接的な体験』をすると、植物の色、におい、形、生息している環境、周りの草花、植物によってくる昆虫などたくさんの方に気がつくことが考えられる。しかし、教師が、「植物のつくり」にだけ注目してほしいと考えた学習では、植物の様子をビデオや写真などに記録し、それを見るといった『間接的な体験』の方が有効である。直接的な体験と間接的な体験をくしま学の中でも効果的に活用していく必要がある。



【図4 体験についてのイメージ】

イ 「課題の設定」「情報の収集」段階での体験活動

- 「課題の設定」段階で、学習の対象に関わる体験活動を取り入れると、子どもたちが様々なことを感じ、疑問をもつようになる。教師が与えた課題ではなく、自分で見つけた疑問だからこそ解決してみたいという意欲が生まれ、その後の主体的な活動につながる。教師は、探究的な活動につながる疑問はどのようなものか、また課題の設定の仕方についての視点を体験活動の前に指導する必要がある。
- 自ら課題をもった子どもは、学習対象に何らかの手段で働きかけ、情報を収集していく。「情報の収集」段階で、体験活動を位置づけ、そこで得た情報は、実感を伴ったものになり、その後、整理・分析したり、まとめたりする際に、より深まりが出てくると考える。

4 指導の実際と考察

(1) 探究的な学習を充実させた「くしま学」の1単元の流れ

- ① 単元名：「知っちゃる？串間の特産品」（中学1年）
- ② 単元目標：串間市で作られている特産品やそれを生産している人々の思いを追究する活動を通して、串間への理解を深め、自分の生き方や串間の将来について考える。
- ③ 単元の流れ

		学習内容及び活動
第1サイクル 串間の特産品について知る	課題の設定	○ 串間市には、どんな特産品があるか調査する。 きんかん、かんしょ、ピーマン、米、水田ゴボウ、マンゴー、キュウリ、肉牛、ブロイラー、魚、スイートピー 等 ○ 調査したい特産品を決めて、調査計画を立てる。
	情報の収集	○ 作られる現場に出向き、その特産品の生産の様子にふれてみる。 ○ 生産に関わる方にゲストティーチャーとして来ていただいて話を聞く。 ○ 手紙や電話、ファックス等を利用して特産品生産者に、聞き取り調査を行う。
	整理・分析	○ 情報を整理・分析する。 ・ マップやグラフの作成 ・ ランキングの作成 ・ 生産者の方の声の整理
	まとめ・表現	○ 調査した内容を発表する。 ○ 発表された内容を見て、良かったところ、改善点、疑問点などを話し合う。

第二サイクル (特産品の現状の課題を見つける)	課題の設定	<p>生産品ブランド化(ルート①)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生産品の売り上げのデータから課題を見つける。 ○ 「たまたまエクセレント」のような串間ブランドと呼ばれるまでの生産者の道のり(苦労)について例示し、他の生産品もブランド化できないか考える。 ・糖度の高さや体に良いことなどの特徴をアピールしている。 	<p>キャリア教育の観点から(ルート②)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生産者(農業従事者)の後継者について、データから課題を見つける。 ・ 後継者が減少傾向にあることから、その現状を探る。
	情報の収集	<ul style="list-style-type: none"> ○ ブランド化に成功した生産者の方に話を聞く。 ○ 他地区での知名度をアンケートで調査する。 ○ 他地区のブランド化された生産品を調査する。 ・ 愛媛県のみかん ・ 大分県のかぼす ・ 福岡県のいちご 等 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 農業に関わる方から、後継者についてアンケートをとり、現状を調査する。 ○ 生徒を対象に、農業に対するイメージをアンケートで調査する。 ○ 農業従事者に聞き取り調査を行う。
	整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査した情報を整理・分析する。 ・ アンケート結果をグラフ化する。 ・ 他地区のブランド化された生産品の共通点を見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 集まった情報から農業のメリット、デメリットを整理する。 ○ 農業希望者が少ない理由を分析する。 ・ アンケートの結果から ・ デメリットとの関係はないか
	まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> ○ ブランド化された特産品についてその方法や生産者の声を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 農業従事者の後継者の現状、またその理由について発表する。
第三サイクル (特産品の課題を解決するための方法を考える)	課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ 串間の特産品をブランド化する作戦を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 後継者が減り続けないようにするために自分たちができることはないか考える。 ・ 生産に対する関心を高める。 ・ 農業をしてみたいと思う人を増やす。
	情報の収集	<ul style="list-style-type: none"> ○ どのような方法があるかを調べる。 ・ マップなどをのせたパンフレットづくり ・ 市報やHPなどへの記事掲載 ・ 地域の素材を使ったレシピをつくり、商品につけて販売する。 ・ キャッチコピー、ネーミング、イメージキャラクター 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 特産品生産者として誇りをもって生産する農業従事者の声を聞く。 ○ 新しい農業の様子などを調査する。(品種改良など) ○ 生産農家で生産の体験をしてみる。
	整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調べた方法から、一番効果のありそうな作戦を分析して選ぶ。 ・ ランキングを用いる ・ メリット、デメリット 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査した内容を整理・分析する。
	まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> ○ ブランド化の方法を発表する。 ○ 実際にできそうなものを吟味する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 農業従事者の仕事をやってみたくなるようなプレゼンテーションをつくる。 ○ 発表をする。
第四サイクル (解決方法を実行し、振り返る)	課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ ブランド化を実行し、反省を行う中で課題を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 農業従事者をすぐに増やすことは難しいが、今の自分たちにできることは他にないか考える。 ・ 地産地消をすすめ、串間の特産物生産を活性化させる。
	情報の収集	<ul style="list-style-type: none"> ○ 実際に作物を作ってみて、ブランドと呼ばれるには、どんなことが必要かを書き出す。 ○ 作った物を評価してもらい、良かった点と改善点を挙げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地産地消をすすめるために、メリットを調査する。 ・ 新鮮なうちに食べられる。栄養価が高い。 ・ 輸送にかかえるエネルギーを削減できる 等
	整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査した内容を整理・分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 集めた情報を整理する。
	まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今までの活動を通して分かったことをレポートにまとめる。 ・ 学習を進めてきて、感じたこと ・ これから生活に生かそうと思ったこと ・ 他に学習してみたいこと 等 	

(2) 体験活動を充実させた探究的な学習の実際

- 小学校第5学年「串間の天然記念物」において授業実践を行った。

授業実践にあたり、以下のような視点をもって取り組んだ。

実践①	授業者が意図する課題(学習させたい内容)を立てさせるために、間接的な体験活動(ビデオ視聴)を取り入れる。
実践②	児童が主体的に学習に取り組んだり、学び方を身につけたりできるようにするために、児童が立てた課題を大切にしながら天然記念物の素晴らしさを学習させる。
実践③	これまで学習した天然記念物のよさを再認識させるとともに、五感を使って新たな課題を設定させるために直接的な体験活動を取り入れる。

(授業実践の流れ)

	学習内容及び学習活動	児童の思考の流れ
実践① (課題の設定)	1 都井岬の馬と幸島のサルのビデオを見て、課題を立てる。	(児童が立てた課題) ①なぜ馬は集団で行動するのだろうか？ ②馬が好きな食べ物は何だろうか？ ③なぜ都井岬に馬がいるのだろうか？ ④御崎馬は都井岬から出ないのか？
実践② (情報の収集)	2 都井岬の馬や幸島のサルの素晴らしさについて調べる。 ○ インタビュー ○ 電話 ○ 図書資料 ○ インターネット	【児童の思考の変化】 馬が好きな食べ物は？ ↓ ・特に芝類が好き ・においが強く、毒のある植物を食べない。 都井岬は食べない植物だらけにならないのか？ ↓ ・牧組合の方々が、馬が食べる植物を育てたり、食べない植物を刈ったりしながら環境を守っている。 牧組合の方々は他にどのような仕事をしているのか？ ↓ ・馬を守るために害虫を駆除する。 ・馬が斜面を滑り落ちて怪我しないように柵を作る。 なぜ、こんなに馬を守ろうとしているのか？ ・野生の在来馬として貴重な存在だから ・大変貴重で串間の誇れるものだから
整理・分析	3 都井岬の馬や幸島のサルのよさについて、情報を整理する。	↓
まとめ・表現	4 都井岬の馬や幸島のサルの素晴らしさについて発表する。	
実践③ (課題の設定) (情報の収集)	1 都井岬を歩き、課題を立てる。 ○ なぜ都井岬の宿泊施設がなくなってしまったのか？ ○ なぜ観光客が少ないのか？ 2 都井岬や幸島の観光客が減っている状況・なぜ減ってしまったのか、その原因を調べたり、それを解決するために頑張っている人々の思いに触れたりする。 ・ インタビュー	児童の思いと現実とのずれ (寂しい雰囲気) ・ホテルがつぶれている ・観光客が少ない ↓ ・なぜ、ホテルがつぶれてしまったのか？ ・以前ホテルは何軒ぐらいあったのだろうか？ ↓ ・観光客が減少している。 ・以前は30軒ほどのホテルがあった。 ・都井岬を盛り上げるためにイベントを行っている。 ・観光客を増やすために話し合いをしている。 都井岬を盛り上げていくために努力している人々がいる。自分ができることはないだろうか？

① 間接的な体験活動を取り入れた実践例【実践①】

単元の導入において間接的な体験活動としてビデオを視聴させ、課題を立てさせた。この体験活動が効果的なものになるために、次の2点に気をつけながらビデオ作成に取り組んだ。

- 設定した課題が串間の天然記念物の素晴らしさにつながるようにする。
- 設定した課題が天然記念物にかかわる人々の思いにつながるようにする。

体験活動の際には、児童に、より多くの疑問をもたせるために、映像を止めながら疑問を書かせた。また、数、色、理由といった視点表【資料1】をもとに、映像を視聴させることで、様々な疑問をもたせるための支援を行った。

【資料1 疑問をもたせるための視点表】

② 児童の思考を大切にした実践例【実践②】

児童の主体的な学習をうながし、関心や意欲を高めるために、児童一人一人の思考を大切にしながら授業を展開していった。まず、一人一人に疑問を見つけさせ、解決に取り組ませた。また、疑問と解決を繰り返させることで、知識を広げ、深めていけるようにした。この疑問と解決を繰り返すことが学び方を身につけさせることにもつながると考えた。さらに、【資料2】をように疑問を書き出させていくことで、自分の思考の流れを視覚化し、自身の知識が広がり、深まってきていることが認識できるようにした。このような工夫を行うことで学習意欲が高まった。

【資料2 児童の思考の流れ】

③ 直接的な体験活動を取り入れた実践例【実践③】

以下の利点があると考え、第2サイクルの新たな「課題の設定」及び「情報の収集」段階で直接的な体験活動を取り入れた。

ア 素晴らしい天然記念物が生息する都井岬は、きっとにぎわっているだろうという児童の思いと都井岬の観光客が少ないこと、ホテルがつぶれてしまっていることなどの現実とのずれを肌で感じさせることができ、学習意欲を高めることができる。

イ 現地で課題設定から課題解決までを行うことで、児童の興味関心を持続させることができる。

ウ 第1サイクルで調べた良さやすばらしさを、実感を伴いながら再認識することができる。

主な学習内容及び学習活動	児童の反応
1 前時までの学習をふりかえる。 2 都井岬を歩き、新たな発見をする。 ○ 観光客の少なさ ○ 営業していないホテル 3 都井岬を歩いた体験について話し合う。 ○ 営業していないホテル ○ 観光客の数の減少 →さびれてきた	○ 営業していないホテルを発見して C1: 何これ!! C2: ...ホテルって書いてあるよ。怖い。 C3: どっかに移転したんじゃない? C4: こっちにもあるよ。 T : 建物の名前は? C3: 違う名前のホテルだ。 C4: じゃあ、やっぱりつぶれたんだ。

- 新たな課題を立てる。

観光客が少なくなってきた理由を探ろう。

- 新たな課題
 - ・ なぜホテルがつぶれたのだろうか？
 - ・ 以前はホテルが何軒ぐらいあったのだろうか？

- 4 聞き取り調査をする。

- 5 感想を書く。

- 学習後の感想
 - ・ 都井岬は火祭りに行った時にたくさんの方がいたので、今日も観光客がたくさんいると思ったけどほとんどいなかったのがびっくりした。
 - ・ 都井岬を盛り上げるために、たくさんの方が努力をしている人がいること分かった。都井岬のために何か自分にできることはないのかな。

(3) 授業の考察

この単元では、子どもたちが、休日に都井岬に行ったり、都井岬のことをよく知る方に話を聞きに行ったりするなど、学習時間外でも意欲的に課題解決へ向けて活動することができた。間接的な体験活動から、疑問と解決を繰り返しながら学びを深めていくことで、問題解決的な学び方を身につけさせることができ、意欲的な活動につながったのだと考えられる。第2サイクルで、直接的な体験活動を取り入れたことで、第1サイクルでの学習内容を実感を伴って理解させるとともに、都井岬の観光客が減っていること等の課題や、それらに対し努力している人々の思いを、深く感じとらせることができた。

VIII 成果と課題

1 主な成果

- 探究的な学習についての理論を整理、構築したことで、探究的な学習の意義や利点を生かした単元の指導計画を立てることができた。
- 課題の設定や情報の収集の段階で、実物に触れる「直接的な体験活動」を位置づけ、実践したことで、子どもたちが、ふるさと申間をより身近に感じ、地域の現状や課題に関心を向けることができた。
- 単元を精選し、探究的な学習を取り入れたことで、子どもたちが学び方を獲得し、他の事象ではどのようなになっているか興味をもち、調べてみようとする姿がみられるようになった。また、地域のために自分が役立つことを、意欲的に考えるようになった。

2 主な課題

- 次年度以降は、授業実践をもとに、「くしま学」についての研修を充実させ、目標に合った資料・教具の開発を進め、全学校で活用できるよう整備・共有・発信する体制を整える必要がある。
- 子どもたちが身に付けた知識や技能、ふるさとを愛する心と態度についての変容を追跡調査をしたり、「くしま」学の指導についての地域間の交流を定期的に行ったりし、指導過程の改善や評価についての研究をしていく必要がある。

<主な参考文献>

- ・ 小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」（平成20年8月） 文部科学省
- ・ 中学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」（平成20年8月） 文部科学省
- ・ 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（平成22年11月） 文部科学省

所長	土肥 昭彦（串間市教育長）	一研究同人	塔尾 勝美（教育委員会事務局長）
指導員	川崎 伸幸（主任指導主事）	事務局	野邊 幸治（教育委員会事務局次長）
	重盛 文人（指導主事）		
研究員	富永 卓公（都井小学校教頭）	高野 睦美（有明小学校）	河野 和寿（大東小学校）
	上野 武志（本城小学校）	貝田 邦彦（福島中学校）	坂本 結香（福島中学校）
	合田 りえ（本城中学校）		